

# 『源氏物語』における遣戸考

## 一浮舟の隔て具としての意味合い一

金 秀 美\*

(e-mail: ssumi5620@korea.ac.kr)

---

### 目 次

---

1. 問題提議
  2. 薫と浮舟との対面場面
  3. 平安時代の建築空間における遣戸
  4. 遣戸と飛弾の工匠
  5. 物語における遣戸の意味
  6. 結論
- 

## 1. 問題提議

『源氏物語』には、現代とは異なる様々な事柄や道具などが用いられ、その中に登場する多様な人間たちの模様を描き出していくのだが、当時の住居に置かれた隔て具もその一つとして数えることができる。

従来隔て具については、玉腰芳夫氏<sup>1)</sup>、池浩三氏<sup>2)</sup>、安原盛彦氏<sup>3)</sup>などの建築の専門家により、寝殿造における隔て具の種類、用途などが究明されてきたが、同時に物語における役割や意味合いを問う論も活発に発表されつつある。末沢明子氏は、物語における障屏具を「住居の伝領、居住、管理の問題と深く関わるもの」として把握しており<sup>4)</sup>、田

---

\* 高麗大学校 日語日文学科 助教授。日本古典文学。

"This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government(MOEHRD)" (KRF-2007-362-A00019)

1) 玉腰芳夫(1980)『古代日本のすまい』ナカニシヤ出版、pp.187-214

2) 池浩三(1989)『源氏物語—その住まいの世界—』中央公論美術出版、pp.201-231

3) 安原盛彦(2000)『源氏物語空間読解』鹿島出版会、pp.23-39

島智子氏はその用例を「行事のしつらい、日常のしつらい、垣間見、男女の攻防」と四つに分類し、その性格を論じる<sup>5)</sup>、特に、近年隔て具は、垣間見、対面、侵入などの場面において男女の間に置かれ、その男女の関係を照射する装置としてその重要性が再認識されている。

このように、物語において隔て具に対する多様な役割が論議される中、本稿では今まで殆んど論究されてこなかった遣戸というものを取り上げ、考察してみたい。特にここで注目したいのは、薫と浮舟との初対面の場面に「遣戸といふもの」(東屋巻92)が二人の間に置かれた隔て具として登場したことである。

当時男女対面の場においては「もの越し」といって几帳、簾、障子などが隔て具として設けられるのが一般的であり、男女対面の際に隔て具が強く意識されていた。さらに『源氏物語』の中、遣戸が対面の際に隔て具として用いられているのは、この場面のみになっている。ということを見ると、この場面における遣戸は、単なる建築空間の仕切り、隔ての具ではなく、物語において何らかの意味を有するものとして検討する必要があるのではなからうか。

このような認識の基に、本稿では、薫と浮舟の初対面の場面を解説することによって、遣戸というものが、浮舟という女君、また物語にいかなる意味合いを有するものなのか論証していきたい。

## 2. 薫と浮舟との対面場面

では、薫と浮舟の初対面の場面で、薫の位置と二人の間に置かれた隔て具がどのように描かれているのか確認してみよう。

(本文1) (宿直人)「家の辰巳の隅の崩れいと危し。この、人の御車入るべくは、引き入れて御門鎖してよ。かかる、人の供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むくむくしく聞きならはぬ心地したまふ。(薫)「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、① 里びたる簀子の端つ方にゐたまへり。

(薫) さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そそきかな  
とうち払ひたまへる追風、いとかたはなるまで東国の里人も驚きぬべし。  
とぎまかうぎまに聞こえのがれん方なければ、② 南の廂に御座ひきつくりひて、入れたてまつる。 心やすくも対面したまはぬを、これかれ押し出でたり。③ 遣戸といふもの鎖して、

4) 末沢明子(1993)「住居・隔てもの・調度―源氏物語における飾りと隔て―」『物語とメディア 新物語研究 1』有精堂、pp.161-171

5) 田島智子(1998)「物語中の屏風・障子」『講座平安文学論究十三』笠間書院、pp.229-254

いささか開けたれば、「④飛驒の工匠も恨めしき隔てかな。かかる物の外には、まだみならず」と愁へたまひて、いかがしたまひけん、入りたまひぬ。(東屋巻 p.92) 6)

中将の君(浮舟の母)は、匂宮が浮舟に接近したことを知り、彼女を二条院の中君のところから三条の家に移す。(本文1)は、それを聞いた薫が宵過ぎる時分に、浮舟の居所を訪問する場面である。

ここで薫は、最初①「里びたる簀子の端つ方」に座り、以後、浮舟側から用意した②「南の廂に御座」に迎えらる。小林美和子氏は『源氏物語』に描かれた懸想人の座を分析し「一般的な接客用の場として、廂の間が使用されてはいるものの、女性側に隔て意識が強い場合には、男性の身分にかかわらず簀子の使用例がある」と説明する7)。

『源氏物語』には数多くの対面場面が描かれているが、当時男女の対面は言葉通り面(顔)を向かって直接会うものではなかった。平安時代の対面が、訪問者との親密度、身分差により、相手の女性が男性を受け入れる位置や隔て具が異なるなど、場所秩序、調度に対する意識が適応されたことは、既に先学により指摘されたところである。玉腰芳夫氏は『源氏物語』の中で男女の初対面の場合、訪問者は簀子の位置で簾を間にし、取り次ぎの女房を介して対面するのが最も疎遠な対面であり、以後親密さにより段階的に変わっていくと指摘する8)。

玉腰芳夫氏の指摘通り、薫は大君と初対面の際に簀子に座り「ありつる御簾」(橋姫巻p.141)を隔てて対面しており、中君との場合にも最初簀子に座り、後に廂の「夜居の僧の座」(宿木巻p.444)に移って「母屋の御簾」を隔てて対面している。とすると、この場面における薫の対面の座が簀子から廂に変わっていくことは、普通なことと理解されよう。

しかし、ここで薫は「簾」ではなく、「遣戸といふもの」を隔てて対面している。ここで登場する遣戸について『大系』の補注は、次のように言及している。

貴族などの邸は、廂の外側に簾垂があり、その外側には格子(葺)がある。①廂の外側を遣戸にしてあるのは、一般の庶民とか、田舎めいた造作の家である。②遣戸の外部に、薫を据えて置くのは失礼でもある。薫は、物を隔てるとしても、簾垂か几帳の隔てて対面する事はあっても、遣戸を隔てた体験はないと、不平を申したのである。

『大系』が問題として取り上げたのは、①廂の外側に遣戸を設置するのは庶民の家であり、貴族の邸ではないこと。もう一つは、②遣戸を隔てて対面することは、高貴な懸想人

6) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注(1994-1998)『新編日本古典文学全集 源氏物語』小学館。以下、『源氏物語』の本文引用は、本書による。

7) 小林美和子(1999)「懸想人の座―簀子と廂」『王朝の表現と文化―源氏物語・枕草子を軸として―』笠間書院、pp.235-254

8) 註(1)の前掲書。pp.187-214

には失礼なこと、二点である。

まず①について、『新大系』が「民家の建具」『新全集』が「身分のいやしい者の家の建具らしい」『集成』が「貴人の部屋には用いぬもの」と注しているように、殆んどの注釈書は、この遣戸を浮舟がいる三条家の田舎風の建具として理解しているようである。また、池浩三氏が「『遣戸といふもの』という言い方から推せば、薫のような上級貴族には、遣戸は馴じみのうすいものであったようだ」<sup>9)</sup>と説明するように、それは薫の観点から馴染みのないものとして取り上げられている。

しかし、その遣戸が廂と簀子の間に設置されていて、その外側に薫が座って対面したという『大系』の指摘は、間違いである。既にテキストで確認したように、薫は廂で遣戸を隔てて母屋にいる浮舟と対面していたのである。

その遣戸が設置された位置について、『新全集』は「普通なら廂と母屋の隔ては簾である。遣戸で隔てられているので、薫は『飛驒の工匠も……』と恨み言を言いかけた」と注し、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』も「普通、母屋と廂を隔てるのは簾である」と、同一な見解を見せている。すなわち、これらの注釈書は、廂と母屋の隔ての具として遣戸が出てくることを異例的なものとして指摘しているのである。

当時建築空間において外部と内部を隔てる仕切りは、住み手の気配にするのではなく、ある程度決まった使われ方があった。廂と簀子の間には、格子、蓐、四隅には妻戸などが設置され、吹き放しの空間内は、簾、壁代、几帳、屏風、障子などの様々の隔ての具が用いられていたのである。とすると、これらの諸注の指摘のように、当時の建築空間の中で、遣戸が廂と母屋との建具として用いられているのは、普通異様なこととして受取るべきであろうか。もしくは、当時男女の対面の際、遣戸を隔て具として用いているのが失礼なことだろうか。

このように、この場面で薫と浮舟の隔て具として登場する遣戸は、異色を放つものであり、まだ解決すべき問題点が残っているように思われる。

### 3. 平安時代の建築空間における遣戸

では、まず平安時代の建築空間において遣戸はいかなる建具であり、当時の作品の中にはどのように描かれていたのか、検討してみたい。

江戸時代の風俗を記した『嬉遊笑覧』「居処一上」には「やり戸は、今用る引戸なり」<sup>10)</sup>と記されており、池浩三氏も「引違戸のことである。框の間に板（綿板）を入れ、

9) 注(2)の前掲書、pp.201-231

10) 『古事類苑 居処部』(1979) 吉川弘文館、p.1218

その表裏に細い横棧を繋ぎ取りつけた戸。いわゆる舞良戸である」<sup>11)</sup>と説明する。即ちこれは両開きの妻戸に対して、横に滑らせて開け閉めする引違戸のことを指しているのであろう。

平安時代、遣戸が華麗な調度類、豪華な室礼として認識されていなかったことは、当時の作品から確認することができる。『枕草子』一四三章段には「いやしげなるもの」として「遣戸厨子」の名が見える。

式部丞の笏。黒き髪筋の筋わろき。布屏風のあたらしき。……遣戸厨子。法師のふとりたる。まことの出雲筵の畳。(p.269)<sup>12)</sup>

ここで列挙される調度類は、絹張りのものより安いとされる「布屏風」や、編目が粗いものと知られる「出雲筵の畳」で、当時王朝人の美学の基準に外れるものである。遣戸厨子の個所に『新全集』の頭注が「引戸に仕立てた厨子。厨子は前に観音開きの扉をつけた収納箱。その扉を引戸にすると何故「いやしげ」であるのか必ずしも明らかではない」と説明することく、厨子のみでは卑しいものとはいえず、遣戸と結び付いて卑しいものになるのであろう。それは遣戸が元々上品なものとして認識されていなかったからではなかろうか。

また『古今著聞集』の記述をみると、

九条のかたよりおこりけるが、京中の家、或はまろび或は柱ばかり残れり。死ぬるものその数を知らず。蓐・遣戸・さらぬ雑物、雲の中に入りて風に随ひて飛びけり。(p.270)<sup>13)</sup>

京の中での家が転倒し、死者が多く発生する中、遣戸は風に吹き飛ばされるものとして描かれる。このように、遣戸は陰惨な風景とともに蓐、その他の雑物のような外回りの建具類に属するものとして出てくるのである。

建築史における建具の様態を考察した高橋康夫氏は、遣戸が元来「上等な建具ではなかったようで、『年中行事絵巻』や『信貴山縁起』など古い絵巻物を見ると、むしろ僧侶の庵室や雑舎、民家などに広く用いられている」と説明し、平安時代遣戸が貴族の邸宅のほか、内裏、仏教建築など広く使用されていたと指摘する<sup>14)</sup>。高橋康夫氏の指摘通り、遣戸はいやしい家の隔て具のみならず『枕草子』の中においても内裏の建具として登場している。

11) 注(2)の前掲書。pp.201-231

12) 松尾聡・永井和子校注・訳(1997)『新編日本古典文学全集 枕草子』小学館

13) 西尾光一、小林保治校注(1986)『古今著聞集』下、新潮日本古典文学集成、新潮社

14) 高橋康夫(1985)『物語ものの建築史 建具のはなし』鹿島出版会、pp.34-38

(A)細殿の遣戸をいとう押しあげたれば、御湯殿に馬道より下りて来る殿上人、萎えたる直衣、指貫の、いみじうほころびたれば、色々の衣どものこぼれ出でたるを押し入れなどして、北の陣ざまに歩み行くに、あきたる戸の前を過ぐとて、纒を引き越して、顔にふたぎていぬるもをかし。(二三一章段、p.369) 15)

引用文(A)をみると、登華殿の西廂とおぼしき細殿の建具として遣戸が設置されている。ここでは、女房たちが朝早く遣戸を開けたところ、折から清涼殿の御湯殿から下りてくる殿上人が自分の姿を恥じ、顔を隠しながら過ぎていくことが記されており、遣戸が高貴な方の部屋の建具ではなく、女房たちの局のものとして描かれているのである。また『古今著聞集』の記事にも、

(B)①隣の中へだての遣戸にあなのありけるよりしと通りて、②遣戸のそばに寝たりける女房のかほにかかりければ、かくとは知らで、「雨の降りてもるぞ」と心得て、さわぎまどひける、をかしかりける事かな。(p.226)

遣戸が女房の居所の建具として出てくる。特に(B)では、傍線部①「隣の中へだての遣戸」や②「遣戸のそばに女房が寝ていた」という表現から、ここでの遣戸が内部の仕切であることが確認される。(A)細殿の遣戸は、殿舎の中の通路である馬道と繋がっているから、母屋と廂の間の隔て具ではなく、外回りの具(廂と簀子)として描かれており、当時の物語をみても、遣戸は殆んど外回りの建具として点描されている。(B)のように母屋と廂の間の隔てとするのは、高橋康夫氏が「多くは外回りの建具として使われているが、内部間仕切としての用法がなかったわけではない」<sup>16)</sup>と指摘するごとく、当時としては珍しい用法といえるのであろう。

さらに『落窪物語』では、女主人公である落窪の姫君の居所の建具として遣戸が繰り返し登場する。

①皆人々静まりぬる折に、典葉、鍵を取りて来て、さしたる戸あく。〈いかならむ〉と胸つぶる。錠あけて遣戸あくるに、いとかたければ、立ち居ひろろぐほどに、あこぎ聞きて、少し遠隠れて見たるに、上下さぐれど、さしたるほどをさぐりあてず。(p.132)

②部屋には錠さしたり。〈これにぞ籠りける〉と見るに、胸つぶれていみじ。這ひ寄りて、錠ひねり見たまふに、さらに動かねば、帯刀を呼び入れたまひて、うちたてを二人してうち放ちて、遣戸の戸を引き放ちつれば、帯刀は出でぬ。(pp.136-137) 17)

15) 松尾聡・永井和子校注・訳(1997)『新編日本古典文学全集 枕草子』小学館

16) 注(12)の前掲書。p.34-38

17) 三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳(2000)『新編日本古典文学全集 落窪物語・堤中納言物語』小学館

この物語の中で、落窪の姫君は意地悪い継母によって「寝殿の放出の、一間なる落窪なる所」(p.17)から「枢戸の廂二間ある部屋の酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋」(p.103)に幽閉される。遣戸はこの物置のような部屋の建具であり、そこには錠が設置されている。この物語では、彼女の居場所の記述とともに遣戸、錠などのものが繰り返し描かれているが、それは、単なる建具ではなく、彼女の境地をそのまま象徴する道具として使われているのである。

以上、これらの事例からみると、遣戸は内裏、貴族の邸のように幅広い建築物に用いられており、諸注が指摘するように「民家の建具」「身分のいやしい者の家の建具」と限定することはできないものの、みやびな王朝人の隔て具や高貴な人の部屋の建具としてのイメージはなかったようである。また『新全集』『鑑賞と基礎知識』が指摘するように、廂と母屋の隔て具として遣戸が設置されるのは、皆無とはいえないが、当時の建築空間においてはごく稀なことであった。さらに男女対面の際、遣戸を隔て具として用いる例は、管見の限り見つからない。

とすると、物語は、何故当時の規範からみて多く外れた遣戸を、薫と浮舟の隔て具として用いたのだろうか。もちろんこの場面で遣戸が出てくることを、浮舟の居場所と関わらせて「それほど高くない身分」という彼女の出自、また、三条家が隠れ家であったという特殊な状況として片付けることも可能であろう。

しかし、ここでの遣戸は、④「飛驒の工匠も恨めしき隔てかな……」にもう一度取り上げられている。諸注が指摘するごとく、この薫の言葉は、飛驒工の説話を踏まえるものであり、この建具は、場面構成や物語により重要なものとして設定されているものと考えられる。

## 4. 遣戸と飛弾の工匠

飛弾工の説話は、川成という絵画の名手と飛弾ノ工という名匠がお互いの腕を競う話であり、その内容は『今昔物語集』巻二十四の第五話に載せられている。やや長いが、以下『今昔』の本文を引用しておく。

### (C) 巻第二十四 百済の川成飛弾工挑語第五

(ア) 而ルニ、其比、飛弾ノ工ト云ふ工有ケリ。都遷ノ時ノ工也。世ニ並無キ者也。武楽院ハ其工ノ起タレバ微妙ナルベシ。

而ル間、此工彼ノ川成トナム各ノ態ヲ挑ニケル。飛弾ノ工川成ニ云ク「我が家ニ一間四面ノ堂ヲナム起タル。御シテ見給へ。『壁ニ絵ナド書テ得サセ給へ』トナム思フ」ト。互ニ挑乍ラ、中吉クテナム戯レケレバ、「此ク云事也」トテ、川成飛弾ノ工ガ家ニ行ヌ。行テ見レバ、実ニ可咲気ナル小サキ堂アリ。四面ニ戸皆開タリ。飛弾ノ工「彼ノ堂ニ入テ、

其内見給へ」ト云へバ、(イ)川成延ニ上テ南ノ戸ヨリ入ラムト為ルニ、其戸ハト閉ヅ。驚テ廻テ西ノ戸ヨリ入ル。亦其ノ戸ハト閉ヌ。亦南ノ戸ハ開ヌ。然レバ北ノ戸ヨリ入ルニハ其戸ハ閉テ、西ノ戸ハ開ヌ。亦東ノ戸ヨリ入ルニ、其戸ハ閉テ、北ノ戸ハ開ヌ。如此廻タル数度入ラムト為ルニ、閉開ツ入ル事ヲ不得。侘テ延ヨリ下ヌ。其時ニ飛彈ノ工咲フ事無限リ。川成「妬」ト思テ返ヌ。

其後、日来ヲ経テ、川成飛彈ノ工ガ許ニ云遣ル様、「我が家ニ御座セ。見セ可奉物ナム有ル」と。飛彈ノ工、「定メテ我ヲ謀ラムズルナメリ」ト思テ不行カヲ、度々懇ニ呼ベバ、工川成ガ家ニ行き、此来レル由ヲ云入レタル、「此方ニ入給へ」ト令云ム。云ニ随テ、(ウ)郎ノ有ル遣戸ヲ引開タレバ、門ニ大キナル人ノ黒ミ脹腐タル臥セリ。臭キ事鼻ニ入様也。

不思懸ニ此ノ音ヲ聞テ咲フ事無限リ。飛彈ノ工、「怖シ」ト思テ土ニ立テルニ、川成其遣戸ヨリ顔ヲ差出テ、「耶、己レ此ク有ケルハ。只来レ」ト云ケレバ、恐々寄テ見レバ、(エ)障紙ノ有ルニ、早ウ、其死人ノ形ヲ書タル也ケリ。堂ニ被謀タルガ妬キニ依テ此クシタル也ケリ。

二人ノ者態、此ナム有ケル。(オ)其此ノ物語ニハ万人所ニ此ヲ語テナム皆人譽ケル、トナム語り伝エタルトヤ。(pp.251-253) 18)

飛彈工は元々飛彈国出身の工匠を称する一般名詞であるが、『今昔物語集』(C)の話では固有名詞化し、傍線部(ア)で説明したように、平安初期の名匠をさしている。

この『今昔』の話は『源氏物語』旧注では典拠として指摘されておらず<sup>19)</sup>、『玉上評釈』が典拠とする試案を提して以来、『集成』『新大系』『新全集』『鑑賞と基礎知識』などの現代注釈書に受け継がれ、現在定着を見ているようである。

すなわち、これらの諸注では『源氏物語』の「飛驒の工匠」と(C)の「飛彈工」という人物を同一人物と見、『源氏物語』が、飛彈工が入ろうとすると戸が閉じられてしまう小堂をつくり、百済の川成を困らせたという『古今』の内容を下敷にしていると指摘する。このように、両話では「遣戸」「戸」が共通して登場し、どの「戸」から入ろうとしても入らなかった川成が「妬」と思った気持に、浮舟と対面する際「遣戸」という頑固な建具によって遮られた薫が「恨めしき隔て」という心情と重なっていると言える。

『源氏物語』の諸注では、①の前半部の話のみを下敷として取り上げるが、『今昔物語集』では、その後川成が飛彈工に復讐する話が続く。特にここで注目すべきことは、後半の話にも「遣戸」が登場していることである。

後半の話を見ると、川成に誘われた飛彈工が彼の家に行き、(ウ)廊下のところにある遣

18) 馬淵和夫・国東文磨・稲垣泰一校注・訳(1999-2002)『新編日本古典文学全集 今昔物語集』小学館

19) 『花鳥余情』は「飛驒の工匠は番匠の惣名也」と注し、『大系』も「飛驒の工匠」を、大工の普通名詞に用いた」と指摘する

戸をあけてみると、黒ずみの大きな人間が腐って横になっている。それは実は川成が書いた絵であったという話である。このように、当代の名匠と画家二人を巡る逸話の中で、(イ)戸と(ウ)遣戸が不思議な建築空間とともに出てくるのである。この後半の内容は「遣戸」が登場した事以外には『源氏物語』の(本文1)の場面と直接共通点を探しかたく、昨今『源氏物語』との関連は論じられてこなかった。しかし、浮舟物語全体を見渡してみると、この『今昔』の話はより深いところでその繋がりが見出されるのである。

『源氏物語』の中では、この「飛驒の工匠」1例のほか、「工匠」という語が全部4例登場するが、これらの用例すべてが浮舟物語と結び付いている。特に、この語が初めて物語に現れる個所は、薫の求愛にわずらっていた中君が、異母妹浮舟の存在を初めて薫に打ち明けるところである。

(本文2)(薫)「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたり  
に、わざと寺などはなくとも、①昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとな  
ん思うたまへなりにたる」とのたまへば、(中君)「②あはれなる御願ひに、また、うたて御手  
洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろ  
めたくぞはべるや」とのたまへば、(薫)「そよ。③その工匠も絵師も、いかでか心にはかな  
ふべきわざならん。④近き世に花降らせたる工匠もはべりけるを、さやうならむ変化の人もが  
な」(中君)「人形のついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」との  
たまふけはひのすこしなつかしきもいとうれしくあはれにて(宿木巻,pp.448-449)

ここで薫は、①宇治の山里に大君を似た人形や絵を作り残して、彼女の供養のため勤行をしたいという。そのような薫の願いに、中君は②「まるで大君への恋を祓い流そうとして  
いるかのようではないか」と反発する。これは、『新全集』の指摘通り「薫の言う『人形  
(像)』を、禊で川に流される人形の意にとりなして反駁」するわけだが、その言葉を正面  
から受けず、薫は亡き大君の「人形」を作る「工匠」と、その絵を描きとる「絵師」を  
求め、④「近い世に、出来ばえのすばらしさに、天から花を降らせた工匠がいたが、その  
ような変化の人でもいてほしいです」という。

三田村雅子氏は、「浮舟は薫と中君の冗談めいたやりとりの中で、『形代』『人  
形』『撫で物』と何度も呼ばれている」<sup>20)</sup>と指摘し、浮舟が大君の「身代わりであること  
は自明なこととしてその紹介の当初から宣告されていた」とする。このように、浮舟が大君の  
人形、形代として設定され、物語に登場することは、既に先学により明らかになっているところ  
である。が、さらに看過できないのは、この、薫と中君の対話に「人形」のみならず、  
「工匠」「絵師」「絵」という言葉が繰り返して登場していることである。また、この④「工  
匠」という語は、その後「変化の工匠求めたまふいとほしさにこそ、かくも」という中君の言

20) 三田村雅子(1956)「浮舟」『国文学』pp.54-57

(451) に再び現れる。

特にこの④「花降らせたる工匠」について『河海抄』『花鳥余情』などの旧注は「飛驒の工匠」のことを典拠として取り上げる<sup>21)</sup>。しかし、これらの旧注の説は出典や具体的な内容が明示されておらず、現代の殆ど注釈書では故事未詳として解され、受け継がれていない<sup>22)</sup>。

もちろん④と同一な内容は『今昔』の(C)には見えず、『大系』の補注が「『河海抄』にも飛驒工匠の事などあげているが、当っているとも思われない」と指摘するように、直接関連を指摘するのは無理かもしれない。しかし、『今昔』の話が「飛驒の工匠」と「川成の絵師」が登場するごとく、(本文2)の場面においても「工匠」「絵師」とが並べて記され、さらに『今昔』がこの「工匠」「絵師」が作り出す神妙なものを物語の重要な素材として描いていくように、(本文2)も「工匠」「絵師」が作り出す亡き大君と酷似した像や画像が求められ、奇跡でも現じてほしいと願っているのである。このように、物語における浮舟の登場と『今昔』の(C)の話と何らかの類似性を見出すことができるのではなからうか。

さらに「工匠」という語は、薫が中君と対面した(本文2)の直後宇治に訪れ、阿闍梨と語らう場面にも現れている。

(本文3)(薫)「昔の人の、ゆゑある御住まひに占め造りたまひけん所をひきこぼたん、情けなきやうなれど、(中略)所のさまあまり川面近く、顕証にもあれば、①なほ寝殿を失ひて、異ざまにも造りかへんの心にてなん」とのたまへば、(阿闍梨)「②仏の御方便にてなん、かの骨の袋を棄てて、つひに聖の道にも入りはべりにける。③この寝殿を御覧するにつけて、御心動きおはしますらん、ひとつにはたいだいしきことなり。また、後の世のすすめともなるべきことにはべりけり。急ぎ仕うまつるべし。暦の博士はからひ申してはべらむ日をうけたまはりて、④ものゆゑ知りたらん工匠二三人を賜りて、こまかなることどもは、仏の御教へのまに仕うまつらせはべらむ」と申す。(宿木巻, pp.455-456)

薫は八宮邸の寝殿をとりこわして御堂を造営することを決め、阿闍梨と相談する。ここで④「もののゆゑ知りたらん工匠」は、寺院建築の作法に詳しい工人のことで「工匠」は、その寝殿の改築のため必要な存在として挙げられている。

そのようなところで、②「仏の御方便……(昔、愛する人との死別を悲しみ、その遺骨を包んで長年の間首にかけていた人も、仏のお導きで、その遺骨の袋を捨てて、ついに仏道に入った)」という阿闍梨の説教が語られる<sup>23)</sup>。このように、亡くした妻の死骸を首に掛

21) 『河海抄』は「ひたのたくみの事也云々」、『花鳥余情』は「或説云ひたのたくみははかりことに花をふらせたり云々」と注する。

22) 『大系』が補注で、「花を降らせた事実は、明らかでない。本居宣長は、古物語にあったかとも考えている。河海抄にも飛驒工匠の事などあげているが、当っているとも思われない」

23) これについて、高木宗監氏は『大日経疏』第十八巻『僧迦托経』から引用されている仏教説話が物語の種となったと推定する。

けていたという奇怪な話は、前述した『今昔』の世界と繋がっているのではなかろうか。

『今昔』の後半の話には、川成が障子に死人の絵を描いたのを、その腕前のすばらしさに、飛驒工が実際の人と間違ってしまった内容が描かれており、『源氏』と『今昔』とは「絵師」「工匠」を巡って、死者たちのクロテスクな世界が展開されるのである。

この寝殿は八宮の住まいであったが、同時に大君・中君の住まいでもある。阿闍梨が、③その寝殿を見るにつけて悲しみに心が乱れるから、早く御堂の造営に着手するよう進めているように、寝殿を壊して別の形に造り変えようとするのは、物語において大君への執着を捨てるという意味合いが込められているようである。(本文3)の次の場面では、薫が弁の尼から浮舟の素姓を聞き知ることになり、物語の話は浮舟のことに移っていく<sup>24)</sup>。このように浮舟物語において八宮の住まいを破壊すること、大君への薫の未練を切り捨てること、浮舟の登場と重なって進行されるのである。

(本文2)においても、薫が大君の人形を求めることを、中君は大君への思いを川で流すこと、彼女への未練を捨てることとして受取っていた。すなわち(本文2)(本文3)の場面では、人形を作り出す「工匠」と新しく御堂を作り出す「工匠」が登場し、大君への思いを切り捨て、浮舟の登場に関わる存在として現れるのである。とすると、ここで「工匠」は単に人形や建築を造る人ではなく、薫において物語において、大君への未練を捨て、大君から浮舟への移行を助力する人として出てくるのではなかろうか。

壊された寝殿の跡に作られた御堂は(本文1)の直前に完成を見せる。その新しい建造物の片方には女性の部屋がこまかにしつらえ<sup>25)</sup>、薫はここに後浮舟を住まわせることになる。このように御堂の完成の記事と連動して、その直後、遣戸を隔てた薫と浮舟との対面の場面が出てくるのである。その遣戸を隔てて、薫の向うの空間にいる浮舟は、工匠と絵師が死んだ大君の代わりに作り出した像や画像のような存在ではないだろうか。このように、物語における浮舟の登場の物語には、『今昔』の世界が深く関わり、いくつかの共通項を有しているように思われる。

## 5. 物語における遣戸の意味

『源氏物語』の中で遣戸の用例は4例、遣戸口2例まで含めて6例であり、他の隔て具に比べて極めて少ない。以下、(本文4)(本文5)(本文6)は『源氏物語』における「遣戸」の用例である。

24) それは「ものついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり」(459)と、薫が弁の尼と話のついでに浮舟のことを言ひ出したと、物語は偶然のような筆致で描いているが、それは物語構成上、緻密に設定されたものと思われる。

25) 「もとあり御しつらひは、いと尊げにて、いま片つ方を女しくこまやかになど」(東屋巻p86)

(本文4) 白栲の衣うつ砧の音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ、空とぶ雁の声とり集めて忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けて、もろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。(夕顔巻 pp.156-157)

(本文5) 宮も、(匂宮)「これはまた誰ぞ。わが名もらすなよ」と口かためたまふを、いとめでたしと思ひきこえたり。ここの宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづき歩けば、このおはします遣戸を隔てて、所得顔にゐたり。声ひきしじめ、かしまりて物語しをるを、答へもえせずをかしと思ひけり。(浮舟巻 p.153)

(本文6) (僧都)「しかじかのことをなむ。六十にあまる年歳、めづらかなるものを見たまへつ」とのたまふ。うち聞くまに、(妹尼)「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞ。まづそのさま見ん」と泣きてのたまふ。(僧都)「ただこの東の遣戸になんはべる。はや御覧ぜよ」と言へば、急ぎ行きて見るに、人も寄りつかでぞ棄ておきたりける。(手習巻 p.286)

(本文4)は、源氏がむさくるしい夕顔の家で一夜をすごした翌朝の風景であり、(本文5)は匂宮が宇治へ赴き、対岸の隠れ家に浮舟をつれ出して一緒に過ごす場面である。また(本文6)は、横川僧都が救出した意識不明の浮舟を妹尼が介抱するところである。

このように『源氏物語』において遣戸は、前述した(本文1)浮舟の三条の小家(本文4)夕顔の五条の家(本文5)匂宮と浮舟が過す宇治川の辺の家(本文6)横川僧都の小野の山荘という場所に出ており、人物といえ、夕顔と浮舟の居場所と関わってのみ描かれているのである。さらに遣戸口の用例を確認すると、

(本文7) げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやくちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、(源氏)「口惜しの花の契りや、一房折りてまるれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる出で来てうち招く。(夕顔巻 p.137)

(本文8) いと恥づかしげにものものしげにて、なべてかやうになどもならしたまはぬ、人柄もやむごとなきに、いとものはかなき住まひなりかし、局などいひてせばくほどなき遣戸口に寄りゐたまへる、かたはらいたくおぼゆれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにものなども聞こゆ。(かげろう巻 p.246)

(本文7)は(本文4)と同じく夕顔の家であり、(本文8)は六条院で小宰相という女房の局の戸口である。この(本文8)の場合、浮舟失踪の後、彼女を想起しながら薫が小宰相と贈答をする場面であることを考えると、浮舟と深く関わっている場面といえよう。

すなわち、遣戸と遣戸口の用例は、夕顔と浮舟と深い関わりを有するようであるが、特にその中で浮舟の用例に集中してみると、(本文1)薫と初対面の時(本文5)匂宮と密会の

場面(本文6)彼女が入水の後、蘇生してはじめて登場する居所に出ており、浮舟物語において遣戸が印象的な場面に点描されていることがわかる。

特にこの(本文5)(本文6)の例は、(本文1)と同様、テキストの中で男女の居場所が指定されていないが、遣戸が外回りの具ではなく、廂と母屋に設置された隔て具として描かれているのである。(本文5)では、隠れ家で匂宮、浮舟がいる部屋と遣戸を隔てて、隣の部屋に時方が宿直しており、(本文6)では、意識不明の浮舟が横になっていた居所と遣戸を隔てて、妹尼が隣の部屋にいる。(本文4)の夕顔の場合は「端近き御座所なりければ」と、源氏が縁(簀子)近い場所(廂)で遣戸を開けて夕顔と一緒に庭園を眺めており、この遣戸は外回りの具であることが分かる。

さきほど(本文1)における遣戸が、当時としては稀な母屋と廂の間に置かれた隔て具であることは確認した通りであるが、(本文1)の場面のみならず、(本文5)(本文6)も遣戸が母屋と廂との隔て具として出ている。このように、王朝物語においてごく少ない遣戸の用例が浮舟の物語に集中して描かれているのみならず、さらに内仕切りという当時として稀な用法として出てくることに注意されよう。それは実は浮舟の居所と世界との隔てを意味するものではなかろうか。(本文1)における遣戸は、新しく接近する薫の世界と浮舟の居所との隔てであり、(本文5)は、匂宮と他人の視線から逃れようとする匂宮と浮舟の愛の空間と世間との隔てであり、(本文6)は蘇生した浮舟と新しく彼女を受け入れる小野の空間との隔てである。

このように、浮舟物語における遣戸は、浮舟の「いやしき家の建具」を物語るものに止まらない。それは、居場所を定めず、さすらっていた浮舟において、その転々とする世界と浮舟の居所との隔てを象徴しているのではなかろうか。

## 6. 結論

本稿は、『源氏物語』における遣戸がどのような場面に描かれているのか検討し、それが単なる隔て具の次元を越えて、浮舟や浮舟物語に重要な意味を投げ掛けるものであることを確認したものである。『源氏物語』において道具を介する隔て現象は、普通対面の場面に際立って見えるものだが、しかし本論で考察したように、浮舟の場合、遣戸を用いた隔て現象は対面の場面に局限せず、彼女の居所と関わってより彼女の人生や物語全体に重要な意味を有するものであった。

現行注釈書は(本文1)の場面における遣戸の下敷として飛驒の工匠の説話を指摘するが、それは(本文1)に限っているのではなく、浮舟の登場や以後物語の展開にも「工匠」「絵師」などを鍵語として共通項を有していたのである。特に『今昔物語集』などの説話には当時王朝物語にはあまり見えない遣戸が多く点描されるが、その遣戸の用例をみると、「埋も

れていた」女性の家へ男性が訪問する際の隔て具として出てきたり、または、怪異な事件が起きる場所の建具として登場したりするのである。

当時几帳、壁代、簾、屏風、障子などの隔て具は布や紙で作られ、隔てながらも可変性、透視性を有していることに比べると、遣戸は板で作られて隣のことが見えない、より閉鎖的なものになっているといえよう。説話の世界において、遣戸が奇怪な場面や不思議場面に頻繁に登場しているのは、このような隔て具の性格をよく活用しているからではなかろうか。さらに、そのような遣戸のイメージは、水に浮かぶ舟のようにさすらい、数奇な運命を背負った浮舟や浮舟物語において用いられ、一種の象徴性を帯びた記号のような役割をしているように思われる。

## 【参考文献】

- ・阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注（1994-1998）『新編日本古典文学全集源氏物語』小学館。
- ・松尾聡・永井和子校注・訳(1997)『新編日本古典文学全集 枕草子』小学館
- ・馬淵和夫・国東文磨・稲垣泰一校注・訳(1999-2002)『新編日本古典文学全集 今昔物語集』小学館
- ・『古事類苑 居処部』(1979) 吉川弘文館、p.1218
  
- 池浩三(1989)『源氏物語—その住まいの世界—』中央公論美術出版、pp.201-231
- 小林美和子(1999)「懸想人の座—簀子と廂」『王朝の表現と文化—源氏物語・枕草子を軸として—』笠間書院、pp.235-254.
- 高橋康夫(1985)『物語ものの建築史 建具のはなし』鹿島出版会、pp.34-38
- 玉腰芳夫(1980)『古代日本のすまい』ナカニシヤ出版、pp.187-214
- 田島智子(1998)「物語中の屏風・障子」『講座平安文学論究十三』笠間書院、pp.229-254
- 末沢明子(1993)「住居・隔てもの・調度—源氏物語における飾りと隔て—」『物語とメディア 新物語研究1』有精堂、pp.161-171
- 三田村雅子(1956)「浮舟」『国文学』pp.54-57
- 安原盛彦(2000)『源氏物語空間読解』鹿島出版会、pp.23-39

## 要 旨

本稿は今まで殆んど論究されてこなかった遣戸というものを取り上げ、考察してみたものである。特にここで注目したのは、薫と浮舟との初対面の場面に、二人の間に置かれた隔て具として「遣戸といふもの」（東屋巻92）が登場したことである。

当時男女の対面の際に遣戸が用いられているのは、『源氏物語』においてこの場面のみになっており、さらに『源氏物語』の中で遣戸の用例は、4例のうち3例が浮舟と結び付いて描かれている。このように王朝物語において稀な存在であった遣戸が、浮舟に関わって多く登場するのは、単なる建築空間の仕切りではなく、物語においてそれ以上の意味合いを有するからではなかろうか。このような認識の基に、本稿では、浮舟物語における遣戸という隔て具の意味合いを探ってみた。

まず平安時代における遣戸の様態を把握するため、当時の作品に見られる遣戸の用例を検討し、この対面場面における遣戸が、当時としては稀な母屋と廂の間に置かれた隔て具であることを確認した。さらに、ここでの遣戸は先行研究において飛弾工の説話を下敷にしているものとして指摘されるが、本稿では、この説話が、この場面みならず、浮舟の登場の場面や御堂の改築の記事などにも「工匠」「絵師」という鍵語で共通項を有し、場面構成や浮舟物語により深く関与するものであることを確認した。

以上のように、浮舟物語における遣戸は、いやしき家の隔て具という性格に止まらず、浮舟の居所と世界との隔てを象徴しているようであり、数奇な運命を背負った浮舟や浮舟物語において一種の象徴性を帯びた記号のような役割を担うものではないかと思われる。

キーワード：浮舟物語、遣戸、隔て、居場所、工、物語の意味

투 고 : 2010. 11. 30

1차 심사 : 2010. 12. 11

2차 심사 : 2011. 1. 08